フヴォストフ・ダヴィドフ事件と日本の見方

— ロシアの貿易利害との関連で —

有 泉 和 子

はじめに

日本の文化年間に当たる 19 世紀の始め、日露間の接触・紛争事件が三つ起きている。レザノフ事件、フヴォストフ・ダヴィドフ事件、ゴロヴニン事件である。¹ これらに関しては、井野辺茂雄『維新前史の研究』(1942)、田保橋潔『近代日本外国関係史』(1930)、郡山良光『幕末日露関係史研究』(1980)、秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』(1999)を始め、先行研究は枚挙に暇がない。

だが特に後二事件間には、単純な一方向的ではない極めて複雑な因果関係があるにも拘らず、現在に至るまで、先の事件が後の事件の原因であるという簡単な見方しかされていない。唯一多少ニュアンスが違い、ある程度了承し得るのが井野辺氏の「かくて幕府は、文化三四年以来の日露間の紛擾は、同十年のゴローニンの放還を以て解決したものと為し」² であろうか。

以前より筆者は、フヴォストフ・ダヴィドフ事件は、ゴロヴニン事件解決のために日露両国が政治的決着をつけるべく、過去に遡り改めて事件化され、海軍軍人であるフヴォストフとダヴィドフは「海賊」にされたものと判断し主張している。³

この主張の一環として、さらにフヴォストフ・ダヴィドフ事件とゴロヴニン事件の関係性を示す一端として、前者はロシアの国家としての対日政策の帰結であり、日本も又国家が行ったと捉えていたことを日露両国の史料より指摘することを本稿の目的とする。⁴

1. ロシアの対日政策変換

ロシアは当時対日通商を欲していた。だがその政策は、レザノフのロシア出発以前と日本退去以後では大きく変化する。直接の契機は欧州政治外交情勢の変動で、ナポレオンを皇帝として擁護強化したフランスの膨張である。本章では、ロシアが国策として対日通商を求めていたさまと、その後の変化の様相を示す。

皇帝アレクサンドル一世宛に提出された 1802 年 7 月 29 日付露米会社幹部会の提言書がある [No. 17]。

内容は露米会社の交易方針を述べたものであるが、同社は太平洋地域ロシア領に存する唯一の貿易体制であることを考慮するならば、これはロシアの貿易方針そのものといえる。

主張の第一点目は北米シトカの重要性である。「ロシア人だけのものであった」同地では外国船が毎年多額の不当利益を得ている。物資人員の重点投入が緊要であるが、イルクーツク地域の数年来の不作で穀物価格が高騰し、キャフタ貿易をも圧迫する現況では、オホーツクでの造船は困難で、輸送船をペテルブルグから直接回航する以外ないとする。

第二点目は世界周航計画推進の請願である。予想利益を 10 項目列挙する中で、クリール諸島アレクサンドル島で開始された移住を拡大し、「クリール人を介して日本に気づかれない方法で通商を開く」ことにより、米等の植物性食料をシベリアの中心地イルクーツクから遠隔の海上進出拠点、カムチャツカ・オホーツク両域の需要に当てられるとした。日本は食料供給地であるとの考え方である。財源と見なされた対中国貿易とは、この点で歴然と違う。

対中貿易では、クルーゼンシュテルンの考えを引き、広東貿易で他国に優位に立ち、英蘭両東印会社の勢力範囲カルカッタ・ベンガル・バタヴィアにも進出し、砂糖・コーヒー・藍等の直買いの道を開くと上申する。後にレザノフ対日使節を乗艦させたナデジタ号艦長クルーゼンシュテルンは、既に 1802 年 1 月 1 日付の世界周航計画提言書の中で「通商のみが海上大国の真の力とその揺るぎなき偉大さの基礎となる」⁵ としたが、同地方における商業利潤に注目し、「ロシアもまた疑いなく対中・対東印貿易により利潤を得ることが出来る」、「広東貿易は重要な意義を有する」、「露米会社の商業活動は広東貿易なくしては成り立ち得ない」ともした。⁶

1803 年 2 月 20 日付、ルミャンツェフ商務相のアレクサンドル一世宛対日・対中貿易に関する提言書も二種残されている。「対日貿易について」[No. 27]、「於広東貿易について」[No. 28] と題された文書である。

このうち前者では、対日通商確立が「帝国の繁栄に陛下が尽力された記念碑として後代に残る」との冒頭

に続けて、日本ではキリスト教徒迫害とポルトガル人追放以来、200年近くオランダ人（原文バタヴィア人）のみが貿易を独占しているが、日本対岸のロシアこそが他の貿易列強に伍して最優位な立場にあり、かつ商人等下からの要望も熟している旨を示唆する。

さらに、1791年のエカテリーナ二世の対日使節は、政治外交上の必要知識を持たない者を選ぶ等失策を犯したが、日本は対露貿易に柔軟な姿勢を示している模様で、長崎に一隻入港を許可したこと、1796年当時のイルクーツク県知事・現元老院議員セリフオンフに第二回日本遠征の勅令が出されたが、女帝死去とともに頓挫し、以後政府の働きかけがなくなったと記す。

クリール諸島での露米会社の活動については、1794年に分遣隊を送り第18島ウルップをアレクサンドル島と改称し30人を入植させたこと、第22島 Мармай（松前）北辺に住むクリール人を懐柔し、対日友好関係を築き、通商の端緒を開くための手段として利用するよう命令文書が出されたと報告する。

対日貿易に関しては「地理的に好都合であることを考慮すると」「極めて有益」とし、交易品として魚、油脂、陸海獣の皮革や毛皮、セイウチやマンモスの牙、羅紗や鏡等の奢侈品を挙げ、「これらと交換に、日本からは北米居住地のみならずシベリア北部全域に必要な米、品質の良さで世界中に知られた棹銅、種々の絹織物や綿織物、銀、漆器等を受け取れる」とし、対日使節派遣を提言し、「この重要任務遂行のため、政治通商の能力知識を備えた人物を登用し、陛下の特別な加護を以て激励し、ロシア帝国の威厳を日本宮廷に威儀を調べ正しく理解させる任務を託し、通商の確たる基礎を日本に築き、隣接する両帝国間の将来にわたる友好関係を確立し、古来日本に定着をしているオランダ人からその利害を我々が脅かす危懼を念入りに払拭し、友誼を得」、「任に当たる官吏には具体的指示を与え、日本語が判る通訳を付け、当地を本年6月に出発すれば、ホーン岬経由で1804年6月には日本に到着できる」と詳細な出発の日時や航路まで明言する [No. 27]。

同文書には「1. 陛下は進言を閣僚会議に付すよう命ぜられた/ 2. 1803年2月13日閣僚会議で承認」との追記がある [No. 27]。閣僚会議は前年1802年9月8日に制定されたばかりの新しい行政組織で、皇帝自らが議長を務め、⁷ 当時の内務大臣⁸ В. П. Кочубейによれば、「アレクサンドル一世の若党寵臣で構成され…制度化された正式国家組織というより皇帝の私的諮問機関であった」⁹ という。進言は皇帝により裁可されたのである。

商務相はレザノフへの訓令で、交渉時の必要事項に関し、礼儀作法、態度、話し方からその内容まで、行動指針として極めて丁寧で行届いた指示を与え、交渉成功に細心の注意を払う一方、失敗した場合を想定し、次善の策をも講ずる。訓令第19項は交渉決裂時の対応で、「松前島で交易を開くよう懇請すべきである。これが成功しなかった場合は、現在アレクサンドル島と改称され会社によって居住地が作られているウルップ島で交易を行う道が残されている。すなわち、クリール人を通して日本品を入手し、この者等を通し我品を売るか、又は交換対象にする」と記す [No. 40]。

これらから判断できることは、日本はあくまで地理的最適地にある食料等物資供給地であり、通商が正規のものであろうが、密貿易であらうが、要は必要物さえ手に入れば良かったことである。具体計画推進者である商務相ですらこの程度である。ある意味でレザノフ対日通商使節のロシア国家における地位が明らかにできる。後のゴロヴニン事件時に「其人を撰み可申と右ウルマンチエフ江申渡候処、エレサノフを撰み出し申候」¹⁰ と日本側にも知られることだが、対日使節にレザノフを推挙したのは商務相自身である。フヴォストフ・ダヴィドフ事件の要因であると理解されるレザノフへの日本の拒否は、国家としてのロシアにとり、実際には、重大又は屈辱的なものではなかった。

かくして、ピョートル大帝治世時からの念願である対日貿易計画は、¹¹ 商務相の企画支援を得、世界周航による海図作成を目的とし軍事演習をも兼ねた海軍の保護を受け、貿易従事者である露米会社幹部で侍従身分をも得たレザノフを長として、莫大な予算をかけ [No. 21]、国家の壮挙として強力に始まったかに見える。だが僅か六ヶ月の交渉の末失敗する。

侍従への昇格、立案者クルーゼンシュテルンとの総責任者交代、皇帝の声がかり等自負が大きかったためか [No. 29]、以後レザノフには恣意が目立つようになる。日本滞在中のレザノフは、著書『滞在記』¹² 彼の史料に見る限り、商務相の訓令を守っていない。後のゴロヴニン事件時には、ムールが「エレサノフを推挙いたし候カラフ・ウルマンチエフ大に人物を見損候段國王江罪を謝し候由も承及候」と述べている。「エレサノフ性急之上高慢に而使節之任に不堪と申候は如何様之事に候哉、其方承及ひ候事有之候哉」との質問に対する答である。¹³ ゴロヴニンの批判も痛烈である。¹⁴

出発前レザノフが商務相から受けた訓令によれば、北米での任務はカディヤック島までであり、同地で毛皮を積み広東に向えというものであった [No. 41]。

フヴォストフ・ダヴィドフ事件と日本の見方

だが対日交渉に失敗したレザノフは、命令を無視し、世界周航任務をも放棄し [No. 70; No. 71]、クルーゼンシュテルンには「私のことについては、病気のため当地に残ったと言ってくださってよい」[No. 70] と言い残し、任務終了地カディヤックを遙かに超え、シトカに向かう。

1805年7月18日ウナラシカ発の露米会社幹部会宛報告書は、「当地からカディヤックに向かい、同地で武装、シトカに向け南下する。部下の士官フヴォストフとダヴィドフは優秀な技術と知性を備え、進取の気性に富み、換言すれば本事業に望みうる最良の人材で、或はビーバー代わりに英船の一隻も捕獲するかもしれない」[No. 75] と、既に内容に事前了承性を有し、一方同日付皇帝宛上申書は次のように激烈である。¹⁵

必要第一は、会社が武装したブリック艦を建造し、当地に砲兵隊を派遣すること。第二には、広大な地域における会社経営は毛皮貿易のみでは維持できず、それ自体援助が必要なオホーツクから食料を移送する現況では北米の会社施設の活動力を高めることは不可能、その点、スペイン領フィリピン等の穀物・ラム酒・砂糖は廉価でカムチャツカ全域を賄えるため、施設強化や造船、「国民が我々との交易を望んでいる日本に門戸を開かせるよう強制することもできる」。「今やフヴォストフ、ダヴィドフという優秀な共働者がいるので、その助けを借り船を建造、明年日本沿岸に向かい、松前の日本人集落を殲滅し、サハリンから日本人を退去させ、日本沿岸に恐怖を与え、以て日本人から漁業を取り上げ、20万の人間から食料を奪うことにより、我々との交易を開かざるをえないようにしたい」、「いずれそうせざるをえまい」、「最新情報では日本人はウルップ島に植民施設を作ることを強行したとのこと」。

この後、上申書中の行動計画に基づき、1806年8月8日付レザノフ自身の訓令を与えられ [No. 91]、同9月24日付で矛盾に満ち、8月8日付の下に付記されるという判断に苦しむ指示書 [No. 94] を追加され、勅許を示唆され、それ以上は何も知らない [No. 102]、露米会社付海軍士官フヴォストフ大尉・ダヴィドフ少尉指揮下に唐太・擇提両島で行われた対日軍事行為、所謂フヴォストフ・ダヴィドフ事件は発生する。

上記上申書は皇帝に届いている。「貴下が1805年7月18日付でウナラシカ島から短い書状と共に私宛てに送られた封書は、御依頼通り陛下にお届けした」と商務相のレザノフ宛書簡に届けた旨の記載がある。

だが書簡の日付は翌年の1806年10月13日付。さらに「貴下の長崎滞在中の報告ならびに日誌は昨年私の元に届いたが、丁度陛下が遠征中であられたため、

御座所へ送付された。書類は陛下の御帰国後すぐ、御指示で順次大臣の閲覧に付された。私の番はまだ来ず、書類は未見のため、貴下に明確な陛下の御意志をお伝えできない」と意思表示に消極的で、交渉に関しても次のように穏便で意味深長である。

「使節派遣の意図が当初の目的を達することができず、誠に残念と言わざるをえない。だが、貴下の船が6ヶ月留め置かれたこと、及び日本政府の長きにわたる不決断が示すところは、私の考えでは、日本政府が通商合意を拒んだのは対外的な理由によるのではなく、国内事情を斟酌し、独自の結論に達したからに他ならない。思うに、事は単に一時的に停滞しただけで、完全に無くなったわけではなく、この種の事は、ゆっくりではあるが歳月と恒常的な接近によって熟するものである。故に露米会社としては、現時点でも日本との通商を視野から外すべきではない。日本人が我々に対して好意的に接してきたことは貴下御自身認めておられるところ、常々繰り返されてきた『北方を記憶すべし』との言葉を記憶に留められたい」[No. 96]。

書簡文中にある皇帝の遠征とは、前年の1805年11月20日に露境連合軍の敗退で終わる対ナポレオン戦、アウステルリッツの戦いであるという。¹⁶ ロシアは対日貿易どころではなく、国家政策の大転換を余儀なくされる事態になっていた。レザノフの日本を侵掠しても貿易を強要するとの上申への回答は、カムチャツカ・ペテルブルグ間の距離と郵便事情を考慮に入れ、さらに結論が出るのに時間がかかったとしても、1年3ヶ月後の日付である。事実上無視されたに等しい。

1807年1月24日付義弟で露米会社取締役ブルダコフ宛レザノフ書簡には「(宮廷へ引き立ててくれた恩人)ガブリエル・ロマノヴッチ(・デルジャーヴィン)のみならず、他の誰からもこれまで唯の一行も手紙は貰ったことがない」とあり、唯一受け取った義母の手紙には「伯爵(ルミャンツェフ商務相)はおまえに不満である」¹⁷ 旨書かれていたらしい [No. 101]。

国家事業として始まった対日貿易は、ロシアを取り巻く国際政治上の変動により、又しても頓挫する。海軍は対仏戦に没頭し、商務相であったルミャンツェフは1808年からは外相を兼任、¹⁸ 露米会社のみが巨大な債務を抱えたまま取り残され、経営不振に陥る。¹⁹ 再び対日貿易が着目されるのは、半世紀後、プチャーチン提督の対日外交軍事使節の企画後である。²⁰

2. 「ロシア国の交易願」

フヴォストフ・ダヴィドフ事件を事件当時の日本側

は、ロシア国の交易願として理解し、海防を強化する一方で国家の威信を保ちながら、交易許可も視野に入れ、処理する道を模索し続けた。この、フヴォストフ・ダヴィドフ事件はロシア国が起したとする考え方は、ゴロヴニン等が捕まり、フヴォストフ・ダヴィドフ両人のことを国家に関係のない海賊であると主張し続け、疑う日本を遂には寄り切り、自らの釈放と引替に「国家」の釈明書を提出するまで続く。実はゴロヴニン等の主張に従い「海賊」と明記され、彼等により訳された文化10年(1813)3月15日付松前奉行支配吟味役・高橋三平、同吟味役並・柑本兵五郎名の論書ロシア語訳文には、直接海賊を指す言葉がない。²¹

本章では、日本がフヴォストフ・ダヴィドフ事件を一個人の行為としてではなく、あくまでロシア国の国家の行為として見ていたことを日本の政策決定機関である老中周辺と事件現場の直接指揮官である箱館奉行、後の松前奉行を中心に見ていく。

日本にとってのフヴォストフ・ダヴィドフ事件は、事実上、発生から6ヶ月以上経った翌年始まったとあってよい。すなわち、文化3年9月、唐太のクシエンコタンにある松前藩運上屋敷が攻撃され、番人4人が連行されたという事件の様相が、翌文化4年の4月7日付松前若狭守家来名による届として、同月10日箱館奉行へ到着、それを受け在勤箱館奉行・羽太安藝守の11日付、次いで18日付の届が江戸に注進された²²ところからである。

これを受け、4月26日に老中牧野備前守は在府箱館奉行・戸川筑前守に書取で下知、同様に5月朔日にも書取が下される。4月26日付は「要害もソウヤは不充分の場所の由、旁ソウヤにて見限の儀相成間敷、「固の場所をはソウヤにて取建の外有之間敷敷におもはれ候」²³と防衛線を宗谷とし唐太へは不介入等、警衛方針の再確認であり、これを受けた羽太正養も「カラフト嶋は懸り隔たる離れ嶋にて、容易く事整ふべきにもあらざれば、まず今年は手を下さずソウヤにて見切、彼處を初として地方の警衛専らにすべきよし、執政方より促し給ふにより、則其意を得て事を謀りぬ」²⁴、すなわち専守防衛と理解し実行した。

5月1日付も「カラフトの儀…一體異國人と争ひ候心得にては、品により差もつれ候儀も出来可致哉、去秋罷越候異國人の狼藉などには一向取合不申方、御國體も可然候」と彼等の行為を「狼藉」と捉え、静観の姿勢を示し、出勢無用の下知をしただけであった。²⁵

まがりなりにもロシア側の意図が伝わったのは、ようやく6月6日、書付を持たされた番人8人がエトロフから宗谷に送還されてからのことである。箱館着は

19日。この間、フヴォストフ等の第2回目の攻撃が文化4年4月から5月にかけて行われている。²⁶4月24、25日にエトロフのナイホが、5月1、2日には同シヤナが攻撃され、箱館奉行支配調役下役・戸田又太夫が退却に際し自害した。²⁷

番人のもたらした書付は、ロシア語文書に片仮名で裏書されたものとその仏訳文書で、唐太に残され、いずれもロシア語で書かれた銅板2枚とアイヌの長老宛書簡をも含め、現在フヴォストフ文書と称されている。

片仮名文書は、オランダ商館長ドゥーフによる蘭訳後和蘭通詞が和解した仏文に先だち、ロシア側の意図として理解され、当初日本にとって事件の唯一の手懸りであった。フヴォストフ文書仏訳文書のドゥーフ訳蘭訳文書が、和蘭通詞・茂伝之進、石橋助左衛門、中山作三郎、本木庄左衛門等により和解されたのが「卯九月十二日」²⁸つまり文化4年9月12日。それに先立つ「卯八月」、つまり文化4年8月にも、和蘭通詞・名村多吉郎により仏訳文書から和解され、「游呂舎人恵登呂布嶋へ傳致せし紙札譯文」として、内容はほぼ正確に伝えられている。²⁹だがロシア語文は努力はしたようであるが結局全く解読できず、³⁰フヴォストフ文書がロシア語原文から正確に訳されたのはゴロヴニン等の助けを借りた村上貞助が和解した「申六月」³¹つまり文化9年6月であった。

この片仮名書き文書は当時ですら読み難ったことは、例えば『松前蝦夷地御用留』³²、『休明光記』³³等にも読み難い旨の記述があり、写本により異同が見られる事でも判る。現物を見た羽太の記したものと、³⁴時間が経った写しと思われる平田篤胤が所持していたもの一つ³⁵とは異なり、さらに平田自身により『千島の白浪』に掲載されたもの³⁶もこれとは違う。

だがこれが交易願と理解されたのは、早い例では、文化4年7月8日付津軽越中守寧親の届に「幾重にも交易之儀預聞済願度」、「此儀御叶被下候は、若御叶不被下候は、」³⁷との理解が示されていることにより判る。

同届に情報源として名指された当人である箱館奉行支配調役並・深山宇平太の名で、文化4年に出されたフヴォストフ文書への答書からも、「通商の願ひかなひ不申」、「オロシヤは…是迄通商不致」、「ろうせきをいたし候上、通商の事を申越れ」、「通商いたし度は、是迄の事をさつはりと改て…其上にてあきないの事を申へし」³⁸と、片仮名文書の要求趣旨を通商と理解し、要求の主体はロシア国と考えていることが判る。

この深山宇平太名の答書は、実は老中から評定の上箱館奉行へ達せられ、箱館奉行を通して出されたもの

フヴォストフ・ダヴィドフ事件と日本の見方

である。それを立証する『休明光記遺稿』中史料でも「其交易之道叶候共、又叶ざるにも」とあることから、³⁹ 老中達が相手方の要求を交易と考えていることも明らかである。さらにこの答書は宛先が「ヲロシア國へ」とあるので、片仮名書きフヴォストフ文書の意味を幕府はあくまで「ロシア国」の「通商願」と理解していた事になる。微塵も現場の指揮官であるフヴォストフ・ダヴィドフの個人的行動とは解釈していない。

高澤憲治氏によると前老中松平定信は將軍家齊から意見を求められ、さらに若年寄堀田撰津守正敦と面談したといい、⁴⁰ 又藤田覚氏によると老中牧野備前守に意見書を提出しているという。⁴¹ 藤田氏の紹介された「蝦夷地一件意見書草案」を読む限り、定信もフヴォストフ・ダヴィドフ事件をロシアの通商願と理解している。それは「たとへは通商交易を願候処云々に付侵掠いたし候と申候は」、⁴² 「魯西亜人致方不法狼藉之上にて交易之事を申聞」⁴³ との言葉で判る。従って將軍や老中、若年寄へもその旨伝えられたものと思われる。

一方片仮名書きフヴォストフ文書の到着後の6月28日に、老中土井大炊頭が「大意は通商之義を一向願ひ候との儀に有之候」⁴⁴ と相手の目的は通商であることを達する。フヴォストフ・ダヴィドフ事件を交易願いのための行為と理解したのである。

ある程度は信が置かれたと見られるフヴォストフ文書仏訳文書のドゥーフ訳からの和解は、内容はロシア語原文にほぼ正確であるが、提出より2日後の9月14日「かひたん心付候儀申上候横文字和解」⁴⁵ が追加提出され、臆測を交えた原文書にないことが述べられており、脅迫度が増している。ドゥーフ訳から倍増された恐怖、ロシア脅威論を始めとする既成の対ロシア観、12月には名指しされた打払い令にもかかわらず、交易を欲する国ロシアという像と、交易要求の手段の一部として同事件は起きたとする意識が依然として崩れていないことは、翌文化5年2月と3月の二度にわたり、将来戦場になる可能性のある切迫した地域であるはずの現場の指揮官、松前奉行・河尻春之、荒尾成章により提出された意見書からも確認できる。⁴⁶

そこでは、来年返事を取りに来ると言い残したフヴォストフ等が戻ってきたときの処置を述べるに際し、「於蝦夷地之交易、今度達て彼方より相願儀候有之候節は」と表現する。つまり交易願である。さらに「詞をも改、去年去々之狼藉をも相詫候而之事に候は、其段相伺可申、其上追而御免御座候は、最初長崎に而レサノト精々申述候趣、粗其通りに相成候に而御座候」⁴⁷ とし、蝦夷地交易は、今度たつて先方から願いがあれば、狼藉を詫びての上の事であるならば、話を

聞いてやり、その上で許しが出れば、長崎でレザノフが申した事がほぼ叶うであろうとする。明かに通商開始要求であり、国王の使節であると日本が理解していたレザノフに言及し、今回交易許可をすれば、先回のロシアの要求はほぼ満たされようというのである。

加えて「去々年来両度彼方より此方を亂妨仕候儀、長崎之恨之由申唱候得は、右之節来り候者たとひ末々之役人に候得共、彼國之志に無相違と奉存候」と、昨年一昨年之狼藉は「長崎の怨み」と申し立てているようだから、たとえ末端の役人であれ、ロシア国の意志に相違あるまいと解釈する。対日使節レザノフの行為やその結果を知っているのだから、この者達もロシア国の役人であろうという論拠である。事件をフヴォストフ・ダヴィドフ等の個人的行為とする意識はない。

和寇をも例に挙げ、明から取り締り依頼の使者が度々来たが、当時日本は乱世で支配制度も行き届かず、又犯人は「海賊」で、我国が仕掛けたものではないので、明でも我国自体を怨み報復しようとはしなかった事実を例証し、今回と比較し、「長崎の怨み」というのも「其謂も一通り相聞、全く恨之無之事にも無御座候に付」とする。引用すると次のようになる。

「本文去々年来両度彼方より此方を亂妨仕候儀、長崎之恨之由申唱候得は、右之節来り候者たとひ末々之役人に候得共、彼國之志に無相違と奉存候得共、猶又今年来候魯西亜人江應對も仕候時宜に御座候は、其節彌両度之趣意得と問詰申上候様可仕と奉存候、以前唐土明之時代毎々日本人之海辺を侵候に苦み候節、度々日本江使者を差越右躰之亂妨を禁呉候様申越候得共、其節は日本乱世に而制度も不相届、且右等之者共は海賊に而、元来此方國地より仕懸け候儀に無之候間、明に而も是か為に日本を讐と仕候事も彼國江返報と申被懸候は卒忽に相當候得共、當時は魯西亜前書日本南北朝以來乱世共違、且長崎之恨と申候得は其謂も一通り相聞、全く恨之無之事にも無御座候に付、此方より返報仕候而も不相當之筋に無御座候得共、大切之事故猶此度趣意隨に問詰候様可仕と奉存候」⁴⁸

松前奉行はフヴォストフ等の行為を海賊強盗の類とは考えていない。それではどうするか。交易を許せというのである。更に、もし御許しになるというのであれば、返事は敢えて延ばさず、今年願立てられたのだから、来年その返答を出し、再来年から事を始めるくらいに致してはいかがかとしている。どこまでいっても交易願に対する処理である。次のようにいう。

「一交易之儀前書之趣追而は（闕）御免御座候思召御座候共、伺之上之儀に付、彼方江對し聊も伺をゆるめ候筋には無御座候得共、若此度之儀（闕）御免御座

候程に候は、往返御挨拶此上強而延し候様に而は不可然、若今年願立候は、来年御挨拶来々年より事始候位には仕度儀に奉存候⁴⁹

これに対して、幕府からは弱腰を責められたようであるが、文化5年3月に再度意見を述べた松前奉行の考え方は「交易之方重も之様に而手弱には無之哉之段被仰聞候、併全く交易を重もに仕、打拂を次に仕候而申上候儀には無御座候、尤交易願之儀は御武威をも示し候上、彼方先達而之罪をも詫候上之儀に而⁵⁰と、交易を主眼にし、打ち払いが従なのではなく、武威を示し、先方が詫びた上でのことだというのである。いづれにせよ「交易願之儀」である。やはりあくまでも交易を求めるロシア国の像は崩れていない。

後のゴロヴニン解放間近文化10年6月24日、高橋三平がゴロヴニン等来航をも交易狙いと考え、「右渡來之本意は、全く交易之糸口を引出し度、手をかへ候方便にも可有之か、ゴロウイン以下、申さは苦肉捨身之謀慮之姿にも可有之か⁵¹と上申するように、日本側は最後までロシアを交易を欲する国として理解している。その場に居る個人は、命を受けただけと解釈し、両事件とも個人的行為とは考えていないのである。

本章冒頭で触れた文化10年3月15日付高橋・柑本名の論書と後述する同年9月26日付松前奉行所名論書には「その國をはつかしめたる事もこれなきところ」、「我國むかしより其國と仇もなく怨もなし」と各々書かれる。やや唐突なこれらの言葉は、ゴロヴニン解放時にすら、フヴォストフ・ダヴィドフ事件をロシア国の行為として見なしていたことを示すものである。

逆にいうとそのためこそ、ロシア国を排除するための法令、所謂露船打拂令を発したともいえる。そもそも露船打払い令とは、フヴォストフ等の行為をロシア国家の行為と考えたからこそ、その行為によりロシア船全体を打払うことを命ずることになるわけである。だがゴロヴニン事件解決時は、フヴォストフ・ダヴィドフ両人を海賊とし、フヴォストフ・ダヴィドフ事件を国家とは関係のない個人の行った海賊行為として処理する。

それが、3月15日付論書に対する返答であり、本来謝罪状であるはずにもかかわらず、「日本人にとり屈辱的⁵²で、「まるでロシア船が日本の貿易と沿岸の住民を脅かし害を与えることが起こりうるとでもいわんばかりの侮蔑的な威嚇がある⁵³とまでムールに言わせた、オホーツク港灣隊長ミニツキーやイルクーツク県知事で民政長官トレスキンの高圧的な回答文書を政治解決のため、全て承知の上で「謝罪状」とし

て受け取った日本側の事件処理なのである。

おわりに

歴史的出来事の場合一般に、ある事件が原因になって過去の事件が起きることはないはずである。だが政治色の濃い事件の場合例外もありうる。政治権力或いは孤立集団が、内政外交の主導確保、集団内部の指導権強化掌握、又は対外的自己正統化を目的とし、過去の出来事或いは既存の事物を新たに利用し、苦境に陥っている現況の打開変革を試みる時である。当事者双方の疲弊は曖昧な結論を受け入れる土壌をも生む。

フヴォストフ・ダヴィドフ事件とゴロヴニン事件の関係は丁度これに当たる。後者解決のために日本は、直接的には原因とは言え、さほど大きな事件ではなかった前者の再事件化と重大化、外交問題でありながら内政重視の政治処理を是非とも必要としたのである。

本稿では詳しくは触れないが、ゴロヴニン事件解決時に、日本側の正式通達書として「ロシアに」渡したのは、文化10年9月26日付の松前奉行名と高橋三平・柑本兵五郎名覚の二通の論書である。

前者⁵⁴は、「海賊」という言葉やフヴォストフ・ダヴィドフ事件とゴロヴニン事件の因果関係を示唆する箇所はあるが、あくまでゴロヴニン等の言い分の提示であり、主張の主眼は、後半の「抑外国と新たに通信通商を議する事は我國の禁にしてゆるさる事」、「我國の浦々はいふに及はず、蝦夷鳴々におもても、異邦の船見ゆる時は銃丸を以打拂ふ事も我國掟厳にして」の2点である。

後者⁵⁵には両事件の関係性に言及する箇所は皆無である。これによると「かつてゑふろはより來りしもの、我國人にきりしたんの教を勸むれば、其人をかへさすして重き罪に行ふは我國法なり、今捕置く其國の者ともかゝる所為なきを以て、此度かへす事をゆるす」と、ゴロヴニンを釈放する理由はキリスト教の布教をしなかったからだというのである。

同論書の主眼は、最初の一つ書き「我國の大禁はきりしたんの教法なり、故にて長崎の外にてゑふろはの船をみれば陸より上たてずして打拂ふ」と、最後の一つ書き、「我國は外國の交易をたのますして國用を辨し來れり」、「此後交易をこふの念を絶ふへきなり」にある。やはり日本はロシアを交易願の国と理解している。「先年より其國の好所を以て頻りに我國を謀るは大なる誤りなれば」には、ラクスマン、レザノフはもちろん、フヴォストフ・ダヴィドフ、ゴロヴニンのすべてが含まれているに違いない。「其國の好所」はあ

くまで国家の行為に対する言辭である。

最終的に日本は、フヴォストフ等は海賊であるとす
るゴロヴニンの主張の強さの割には、その点を曖昧に
したまま政治決着をつけたことになる。結局あくまで
両者の関係を疑い、又ゴロヴニンの来航を通商開始要
求と関連付けて考えていたのであろう。海賊行為であ
ると決め付けているのは、日露両国とも、当時の人間
ではなく、後世の人間なのである。

(ありいずみ かずこ、東京大学史料編纂所)

注

- 1 それぞれに対して今このように名付け、以下の論考を展開していく。レザノフの場合は一般に「レザノフ来航」と称されるが、寛政4年9月3日根室に来航したラクスマンと違い、後に日露間の武力紛争フヴォストフ・ダヴィドフ事件の直接の誘引になっている。平和裏に解決した「ラクスマン来航」との違いに着目し、且つ又文化年間の3事件が、互いに緊密に関係することを強調するために、「レザノフ事件」と名付けた。
- 2 井野辺茂雄『維新前史の研究』、中文館書店、1942、257。
- 3 拙稿「フヴォストフ・ダヴィドフ事件とゴロヴニン事件その相互関係を日露両国の史料から考える」(東京大学大学院人文社会系研究科提出修士論文、2002)；「海賊にされた海軍士官フヴォストフとダヴィドフ」東京大学人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報『SLAVISTIKA』XIX、2003；「ゴロヴニン事件の日本側の一記録(第4回)『北邊紀聞』翻刻(3)ナウカ『窓』122、2002.10；「ゴロヴニン事件の日本側の一記録(第7回)『北邊紀聞』翻刻(6)ナウカ『窓』125、2003.7；「ゴロヴニン事件の日本側の一記録(第8回)フヴォストフ・ダヴィドフ事件とゴロヴニン事件」ナウカ『窓』126、2003.10；「海賊にされた海軍士官フヴォストフとダヴィドフ フヴォストフ・ダヴィドフ事件とゴロヴニン事件」2003年度第53回日本ロシア文学会総会・研究発表会報告(大阪)2003.11.2。
- 4 ロシア側史料集は主に《Российско-Американская компания и изучение Тихоокеанского Севера, 1799-1815. Сборник документов. М. 1994》に拠り、出典は同史料中の通算番号を [] 内に入れて示した。
- 5 Пасецкий В. М. Иван Федорович Крузенштерн. М., 1974. С. 22.
- 6 A. J. von Krusenstern. Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806 auf Befehl seiner Kaiserlichen Majestät Alexander des Ersten auf den Schiffen Nadeshda und Newa unter dem Commando des Capitains von der Kaiserlichen Marine A. J. von Krusenstern. 1810-1812. I, Einl. XIV. II, 360, 365.
- 7 Раскин Д. И. Высшие и центральные государственные учреждения России. 1801-1917. Т. 1. СПб., 1998. С. 62-66.
- 8 Русский Биографический словарь. СПб., 1903. Reprint by Kraus Reprint co. NY., 1963. Т. 9. С. 366-382.
- 9 Шенелёв Л. Е. Чиновный мир России: XVIII-начало XXв. СПб., 1999. С. 59.
- 10 東京大学史料編纂所蔵『向山誠齋雜記』己酉雜綴(十五)『俄羅斯人陳情』(4109-69-199)九十五ウ。
- 11 Куликова А. М. Востоковедение в российских законодательных актах (конца XVIIIв.-1917г.). СПб., 1994.
- 12 レザノフの滞在日誌は、現在ペテルブルグの国立図書館古文書部に所蔵され(ОРРНБ. Ф. IV. лл. 482. 1-3. Копия)、本稿使用史料集にも一部収録されている(Российско-Американская компания...с. 98-111. No. 40)。大島幹雄訳岩波文庫『日本滞在日記 1804-1805』(2000)とその原本《Командор. Страницы жизни и деятельность камергера Его Императорского Двора, обер-прокурора Сената, руководителя первой русской кругосветной экспедиции Н. П. Резанова. Красноярск, 1995》、上記史料集所収部分以外、筆者は未見。
- 13 『向山誠齋雜記』内『俄羅斯人陳情』九十八ウ-百ウ。
- 14 Головин В. М. Записки флота капитана Головина о приключениях его в плену у японцев в 1811, 1812 и 1813 годах с приобщением замечаний его о японском государстве и народе. Хабаровск, 1972. С. 296.
- 15 Тихменев П. А. Историческое обозрение образования Российско-Американской компании и действий ее до настоящего времени. Часть. 2 Приложение. СПб., 1861. С. 192-195.
- 16 Российско-Американская компания...1994. С. 254.
- 17 カッコ内引用者。
- 18 Там же. С. 271; Русский Биографический словарь. Т. 18. С. 461-591.
- 19 Тихменев П. А. Историческое обозрение... Ч. 1. С. 369; Окунь С. Б. Российско-Американская компания 1919. М., С. 210-211.
- 20 Соболев В. С. Дабы постановить между Россией и Японией мир и дружбу... К 150-летию военно-дипломатической миссии адмирала Е. В. Путятина. 『東京大学史料編纂所研究紀要』14, 2004.
- 21 日露両国語論書ともロシア国立史料館所蔵。筆者は岡山大学名誉教授・保田孝一氏蔵複写書で確認。前出拙稿「ゴロヴニン事件の日本側の一記録(第8回)フヴォストフ・ダヴィドフ事件とゴロヴニン事件」で触れた。
- 22 『通航一覧』卷之二八四(国書刊行会1913年版)第7, 217.
- 23 『通航一覧』卷之二八四 第7, 226.
- 24 『休明光記』卷之七羽太正養『新撰北海道史』第5卷 北海道庁, 1991, 480.
- 25 『通航一覧』卷之二八四 第7, 228.
- 26 『休明光記』卷之七『新撰北海道史』第5卷480-529. 『通航一覧』卷之二八.
- 27 『北地日記』『北方史料集成』第5卷, 北海道出版企画センター, 1994, 476. その他『通航一覧』卷之二八七, 『休明光記』卷之八等.

- ²⁸ 松本英治「オランダ商館ドゥーフとフヴォストフ文書」『一滴』2001, 84.
- ²⁹ 国立歴史民俗博物館所蔵, 平田篤胤関係文書, 冊子七七.
- ³⁰ 同上.
- ³¹ 古河歴史博物館所蔵『魯西亜人ガワビン外五人出奔吟味書付等書留』(B172).
- ³² 『通航一覧』卷之二九二 第7, 312-313.
- ³³ 『休明光記』卷之八『新撰北海道史』第5巻489.
- ³⁴ 上掲書489.
- ³⁵ 国立歴史民俗博物館所蔵, 平田篤胤関係文書, 冊子七七.
- ³⁶ 『千島の白浪』『北方史料集成』第5巻320.
- ³⁷ 『通航一覧』卷之二九二 第7, 309-310.
- ³⁸ 『通航一覧』卷之二九二 第7, 313.
- ³⁹ 『休明光記遺稿』卷之八には「(対露政策については…)とするして呈進に及しかば, 御老中方御一覧之上に而, 兎も角にも其時に應して宜敷取計べとしの御事也, 依之先彼等の方よりカラフト嶋之番人源七に認めさせて送りし處の返書之儀は, カラフト島ウルップ嶋之内に又々當年も来るべしとの事にて, 其交易之道叶候共, 又叶ざるにも承るべしとの事なれば, 先其返書をも認むべしとて御評定之上に而書せ給ふ。其通書之文言は, 彼等の方にある處のエトロフ嶋之番人五郎治, 佐兵衛等にも讀得べく様に認めさせらるゝ其文左の如し, (中略=深山宇平太の答書), かくの如く認められて, 松前奉行の方迄達し給ふにぞ其旨をかしこまりて, 若當年魯西亜人も渡海もあらば, つかはさるべしとの御事なり」とある(『新撰北海道史』1338)。尚この『休明光記遺稿』は羽太による成
- 立が文化10年頃(『新撰北海道史』1253)という関係もあり, 文中, 「箱館奉行」ではなく「松前奉行」となっている。
- ⁴⁰ 「老中松平信明の辞職と復職」『南紀徳川史研究』5, 1994, 106.
- ⁴¹ 『東京大学史料編纂所研究紀要』6, 1996, 51-52.
- ⁴² 上掲書55頁上段.
- ⁴³ 上掲書56頁上段.
- ⁴⁴ 『通航一覧』卷之二九二 第7, 315.
- ⁴⁵ 松本英治上掲書85-86.
- ⁴⁶ 『蠹餘一得』四集卷二「川尻氏建白」629-635(『内閣文庫所蔵史籍叢刊』4『蠹餘一得(2)』汲古書院, 1981).
- ⁴⁷ 『蠹餘一得』629.
- ⁴⁸ 上掲書631.
- ⁴⁹ 上掲書630. 闕字部分は(闕)とした。
- ⁵⁰ 上掲書633.
- ⁵¹ 『通航一覧』卷之三一一 第8, 57.
- ⁵² Головин В. М. Записки флота.... С. 277.
- ⁵³ Там же. С. 274.
- ⁵⁴ 日露両国語ともロシア国立史料館所蔵, 保田孝一氏蔵複写物を使用。日本語原本は『通航一覧』卷之三一二にも所収。表記等はかなり違う。
- ⁵⁵ 日露両国ともロシア帝国外交史料館所蔵, 保田氏蔵複写物を使用。ロシア語訳文はロシア国立海軍文書館も所蔵するが(ЦГАВМФ, ф. 7. оп. 1, д. 12, лл. 567-585), 外交史料館所蔵のものやや表現が違う。日本語原本は『通航一覧』卷之三一二にも所載。

Кадзукo АРИИДЗУМИ

Инцидент с Хвостовым и Давыдовым и мнение Японии

(в связи с торговыми интересами России)

В начале 19-го века, в период Бунка по японскому летосчислению, между Японией и Россией происходили три конфликта: инцидент с Резановым, инцидент с Хвостовым и Давыдовым, инцидент с Головинным. Несмотря на то, что отношения между последними двумя инцидентами не являются простыми и односторонними, а тут наблюдается сложная причинная связь, до сих пор просто считается, что предыдущий инцидент служит причиной последующего. Среди научных исследований только монографии Инобэ Сигэо [井野辺茂雄] «Изучение предыстории реставрации Мэйдзи [維新前史の研究]» (1942) и «История реставрации Мэйдзи в новом освещении [新維新史考]» (1943) немного отличаются от других своим истолкованием.

Автор настоящей работы несколько раз высказывает мнение, что при разрешении инцидента с Головинным обе страны снова придавали инциденту с Хвостовым и Давыдовым характер скандала с тем, чтобы добиться политического решения вопроса, и тем самым сделали морских офицеров Хвостова и Давыдова именно «пиратами».

Для того, чтобы подтвердить названную точку зрения автора и разъяснить отношения между инцидентом с Хвостовым и Давыдовым и инцидентом с Головинным, настоящая статья, опираясь на исторические документы обеих стран, ставит своей целью указать на то, что первый инцидент является следствием внешней политики российского государства, что Япония тоже так считала, а также что именно поэтому Япония в конечном итоге оставила в стороне формальную версию «пираты» и поставила точку на инциденте с Головинным.